

frostbite

NORITOSHI HIRAKAWA



J A N U A R Y 8 - 2 0 , 1 9 9 0

平川典俊「フロストバイト」展 平成2年1月8日—20日 ギャラリー・サージ、東京

フロストバイト

凍傷・しもやけ

今日まで、男性はしばしば女性を、去勢される対象として恐れてきた。

しかし同時に男性は、女性が表示羞恥心によって男性でいることが可能であった。

羞恥心は、女性の中に無意識に男性の領域を設定し、意識の中に空間的な境界線を男性との間において作り上げてきた。

また、男性は女性との同一の空間において制度を維持させることが困難であったため、一時的に女性を排除してきた。

それは、女性の持つ身体性Ⅱ生理が制度を脅かすものとして、制度から一時的に遠ざけられてきたからである。

女性の制度への常時的参入は、メディアが制度に組み込まれていくことによって本格化した。

メディアは、女性が対男性において保持していた羞恥心を含む、女性の身体性Ⅱ生理を基盤としてきた**感覚**を、メディアが持つ身体性の消失という特性によって、女性の身体性Ⅱ生理から遊離していった。

今日、女性はメディアの助けを借りて、制度を男性と同一空間において維持している。

男性は女性の持つ身体性Ⅱ生理を、身体の存在の確認のために手懸かりとしてきた。それによって制度を背負い、維持し続けることができた。

今、目の前に男性にとって、身体の存在の確認のための手懸かりがあるにも拘らず、女性は、身体性Ⅱ生理を基盤とした**感覚**をメディアの中に頂けてしまっている（感覚は、身体を離れたコミュニケーションのコードの中にある）。

それはまるでフロストバイトに侵されている時のように、身体がありながら感覚を失った状態に陥っているのと同じであり、このまま放っておくと、身体が存在さえもが危機に瀕するようになるかもしれない。

現在、男性は、女性の制度への常時的参入により、女性とともに同一の空間を共有することによって、女性に去勢される恐怖を、身体の存在の確認のための手懸かりの欠如感とともに抱きながら生きている。

一方、女性は、女性の身体性Ⅱ生理をも、より完全な、制度への参入のため、無視あるいは忘却しようというフロストバイ特的症状を、自ら一層強めていこうとしている。

社会 共同体の秩序Ⅱ生産

平川典俊

高度情報化 通信・装置によるコミュニケーション

身体を超えたコミュニケーションに関わるあらゆるシステム

羞恥心・感情等を含む性的特質をもった身体に対する無意識的精神の反応

男性は存在のための制度を背負った人間であり、女性は制度のために身体性Ⅱ生理を持った人間である。

女性にとって、身体の存在の確認のための手懸かりは、自らの身体性Ⅱ生理にあらずだが、現在、制度へと移行しつつある。



Model: Saiko Kurokawa Place: Ginza Motokobikibashiwa public toilet
Time: 2:30p.m. August 25, 1989
150×100cm



Model: Hitomi Kitamura Place: Yurakucho Sanshin-bldg. (2 floor)
Time: 3:20p.m. September 2, 1989
150×100cm

Model: **Noriko Nagata** Place: **Sumitomo-seimei aoyama-bldg.(1 floor)**
Time: 1:35p.m. September 10, 1989
150×100cm



Model: **Miyuki Ito** Place: **Ikebukuro Sunshine-city Mitsukoshi (2 floor)**
Time: 3:05p.m. September 27, 1989
150×100cm





Model: Naho Eno Place: Sophia University (bldg.2,2 floor)
Time: 2:20p.m. September 30, 1989
150×100cm



Model: Alisa Nishihata Place: Meiji-jingu(shrine)-gyoen's toilet
Time: 11:55a.m. October 14, 1989
150×100cm

Photographing data
Camera: Contax 139
Lens: Carl Zeiss 2.8/28
Film: Fuji Neopon 1600 (Super Presto)
Shutter-speed: 1/15sec.

我々のコミュニケーションは成立する瞬間において対象との絶対的な近さを志向するにも関わらず、なんらかの意識されざるメディアが必要とされるがゆえに、我々とその対象との間にいつも微小の隔絶を生じさせる。

平川典俊はこの微小な隔絶がもたらす意識されざる危機、コミュニケーションの中のデイスコミュニケーションを、幾つかの様式で作品化し、様々な都市で発表してきた。

彼の作品において、目に見える構成的素材はコミュニケーションの場としての迷路を紡ぎ、素材を支える語群はその場に潜む危機の在処を教える地図となる。鑑賞者としての我々が地図を頼りに迷路を進むときに起こる危機感の共有を経て、平川典俊の作品は初めて作品としての真の姿を表わすようになっていく。

この「フロストバイト」においてもやはり我々の作品は虚ろな視線を向ける女性像の中にも、平川典俊の言葉の中にもない。「フロストバイト」は、我々の中に危機が導かれた時のその体験こそを「フロストバイト」という名で作品化するのである。そしてこのように知的に構成される彼の作品はまた、目に見える構成的素材が与える独特の美によって空間に固定されたものだけが作品として受け取られてしまうこともあるが、これは平川典俊が思想家としての資質と芸術家としての資質を兼ね備えた希有な一例であることを証している。

私はその作品の特質と作品間の思想の継続性から、平川典俊を、成立の根底からくる真の新鮮さを体現した数少ない現代美術の作家の一人であると考えているが、この評価は早晩正当なものとなるだろう。

The moment communication is established, we strive to remove all distances with whom we are communicating. However, since we must unconsciously use some form of media to communicate, we cannot avoid creating a minute distance between us.

Noritoshi Hirakawa has presented this theme — the unconscious crisis brought about by the minute communication gap; discommunication within communication — in various ways, in various cities.

In his work, the visual elements create a labyrinthine world of communication, and the words that support the elements provide us a map that tells us where in that field crises are hidden. His work reveals itself only when the viewer shares the critical experience of journeying through the labyrinth guided by this map.

Likewise, in "Frostbite", the work does not lie solely in the blank-faced female figure nor solely in Hirakawa's words. Our own experience of crisis completes his work and names it "Frostbite". Although well thought-out and intellectually composed his works are, the visual elements alone, with their unique beauty, are sometimes appreciated as his creation. But this is a strong proof that he has the rare gift of being both a thinker and an artist.

From the uniqueness of his work and the conceptual coherency that binds them together, I believe Noritoshi Hirakawa is one of the rare modern artists who possess a truly new process of creation.

Noritoshi Hirakawa

1960 Born in Fukuoka, Japan **1979-85** Studied Sociology (Media, Psychoanalysis) at Toyo University, Tokyo **1983-87** Traveled over 20 countries as field-work for Sociology.

Solo exhibitions: **1988 Jan.15-22 PASSING MOMENTS** Gallery Tamaya, Tokyo **Nov. 28-Dec.3 OUT OF BREATH** Gallery Parergon II, Tokyo **1989 Mar. 27-Apr.28 ENTROPIA** Citicorp Citibank Shinjuku, Tokyo **May 20-Jun.11 YEARNINGS OF MONTEZUMA** Taipei Fine Arts Museum, Taipei **Jul.15-29 INFLUENZA** Art Gallery of the Faculty of Painting, Sculpture and Graphic Arts in Silpakorn University, Bangkok **1990 Jan.8-20 FROSTBITE** Gallery Surge, Tokyo **Book: 1990 NO MORE PAINS OF ISAAC NEWTON** Youbi-sha, Tokyo

平川典俊

昭和35年、福岡県生まれ。幼少の頃、家には2頭の山羊がいた。17歳の時からヒッチハイクを始め、現在まで20カ国以上を放浪してきた。現在、自身の経験を伴った知覚の認識を通して、作品づくりをおこなっている。

**GALLERY
SURGE**

企画 ギャラリー・サージ 東京都千代田区岩本町2-7-13 渡辺ビル2F 電話 03-861-2581

Publisher: **Gallery Surge** 2-7-13, Iwamoto-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 101 Tel. (03)861 2581 Translation: **Osamu Kaneko** Graphic Design: **Cohman Ping-choeng** Printing: **Nakayama Toppan Insatsu**, Tokyo ©1990 **Noritoshi Hirakawa** and **Gallery Surge**